

# 近代作家 書簡文鑑賞辞典

村松定孝

編

書簡を通して作家の人間像を浮彫する！

書簡文にライトをあて、近代作家の考察と、

珠玉の書簡文の鑑賞を兼ね、

さらに読者は、作家の切実なる生の声を聞くことができる！

なま

東京堂出版

# 近代作家 書簡文鑑賞辭典

村松定孝

編

東京堂出版

### 編者略歴

大正7年山梨県に生まれる。昭和24年早稲田大学文学部大学院修了。上智大学名誉教授、早稲田大学、昭和女子大学講師。文学博士。

著書『近代文学の系譜』（社会思想社）、『泉鏡花事典』（有精堂出版）、『あちさる供養頌—わが泉鏡花』（新潮社）、『文章表現法』『新版文章表現辞典』『国語表現辞典』『四字成語活用辞典』『近代作家名文句辞典』『近代作家エピソード辞典』（東京堂出版）ほか多数。

現住所 東京都文京区大塚6-9-3

## 近代作家書簡文鑑賞辞典

---

平成4年12月10日 初版印刷

平成4年12月30日 初版発行

---

|       |                        |
|-------|------------------------|
| 編 者   | むら まつ きだ たか<br>村 松 定 孝 |
| 発 行 者 | 大 橋 信 夫                |
| 組 版   | 東 京 コ ピ イ              |
| 印 刷 所 | 理 想 社                  |
| 製 本 所 | 徳 住 製 本 所              |

---

発 行 所 株式 会 社 東 京 堂 出 版

東京都千代田区神田錦町3-7〔〒101〕

電話 東京3233-3741 振替 東京3-270

---

ISBN4-490-10329-8 C1595 ©Sadataka Muramatu 1992

Printed in Japan

## はじめに

本書の内容は、次の三部を以て、構成されている。

第一部は、著名な日本近代作家の「近代小説に現われた書簡形式」十四編を列挙したものであり、明治大正昭和それぞれの時代を代表する作家の思想が文体や文章感覚を通して滲み出ていることを、読者諸兄姉は各作品を鑑賞することで、充分に諒察なされうるものと信じる。

以下、具体的コメントをほどこすならば、小説のほとんど全文が書簡形式であるものを、国木田独歩、永井荷風、近松秋江、芥川龍之介、菊池寛、梶井基次郎、井上靖の名作から選び出してみた。次に部分的とはいえ、かなりのスペースが書簡体で進行され、それが作品の骨子をなしているものを、武者小路実篤、谷崎潤一郎、葉山嘉樹、太宰治の代表作から採りあげた。さらに、書簡の個所は、ごく僅かではあるが、その部分が宝石のような輝きをみせ、全文の効果をゆたかにしているものとして、森鷗外、中河与一、丹羽文雄の小説の書簡挿入

部分に注目することにした。

第一部は、このように大別できるが、右の如くに区分したにせよ、いずれの場合でも、文芸における書簡体の優位性を語るうえでは遜色なきことは疑いを容れない。

読者は、ここに着目して、第一部の鑑賞を手はじめに、続く第二部の「近代作家の書簡の諸相」を眺めてゆくスタディにいそしんで欲しい。

さて、第一部が作家によって創られた芸術作品であるのに対して、第二部の各作家の書簡十八編からは、それぞれの作家の表情を連想し生<sup>な</sup>まの切実なる声を聞くことができる。

前半の十一編までは既に他界した、文学史を飾る文学者によって発信されたもので、坪内逍遙、尾崎紅葉、樋口一葉、泉鏡花、夏目漱石、徳富蘆花、北原白秋、佐藤春夫、山本有三、川端康成、神西清のそれを収めた。書簡の宛先が志賀直哉、芥川龍之介、岸田國士であることから、或いは若き日の宮本百合子の名が示されている点などから作家研究上の資料として役立ちうるであろうし、蘆花の明治大帝への嘆願書の如きも近代政治史の一齣を象徴していると考えられる。

残りの七編は現存の井伏鱒二、佐多稲子、野口富士男、杉本苑子、平岩弓枝といった老大家から中堅として活躍中の人々と、最近物故された仏文学者生島遼一氏及び独文学者芳賀檀氏の、いずれも著者宛に寄せられた個性あふれる書簡を収録した。

なお、第二部に掲げた、すべての書簡の内容を説明する形で、目次にサブタイトルを付しておいたから判読の際のよすがとされることを期待する。

以上のほかに、これは第二部の付録に該当する意味で文集の如きを「葉書にみる作家の面影」と題して設けた。

ふつう、われわれは日常生活で、葉書ですませる場合は、用件のみを走り書きにするのが一般で、冠婚葬祭の挨拶文や通知の如きも、無味乾燥な、およそ文学的詩情とは縁遠い文章になりがちである。

ところが、文学者の筆になる葉書文には、簡潔な中に趣きの深い名文が少くない。

古来、最も簡単明瞭な手紙文の範例として挙げられるものとして、

「一筆啓上つかまつる。油断大敵、火の用心、お・せ・ん・泣かすな馬肥やせ」

なる一筆書きが顕著であるが、これは武士が旅先から郷里の妻に寄せた手紙の模範文とされている。短くまとまっているのが味噌であるが、油断大敵の四字に――盗難をさけ、家事をきちんとし、さらに他人の誘惑に乘せられるな――といった警告もふくまれているようだ。お・せ・んは多分幼児の名前であろう。しかし、この短い手紙でも、まだ無駄がないとはいえない。はじめの「一筆啓上」は無くても内容は通じる。それに模範文とはいえ、あまりに命令的なのが気になる。おそらく、これは実際の夫婦間の書簡が流布されたのではなく、書道の消息

文の練習の手本として作られたものではあるまいか。つまり、心の細やかさが感じられない。そこへゆくと、次にあげる平安朝時代の貴族の女性の手になる文は、わずか二行のうちに発信者の心情が深くこめられている。

ちかころひとのいふことあり まことか われさへなんひとけなうおほゆる 夜のまに  
もわたりたまへかし

これは敦道親王（冷泉院第四皇子）妃の姉から妃に届いたもので、「親王と和泉式部との噂が立っているようですが、わたくしでさえも、人事ならず、たまらなく切ないおもいなのですから、あなたとしたらどんなにか口惜しく悲しいことでしょう。昼間は人目につくから晩方でも、そっとこちらへ訪ねていらっしゃいな。善後策を講じる相談をいたしましょう」といったところか。味わえば味わうほど妃の姉の心根と姉妹愛がしのばれる名文である。要をえて、無駄がないばかりか、真情があふれ、詩的リズムが横溢している。

ところで、本書の著者は、近代作家の葉書文の中から右にみるような名文に匹敵する詩情ゆたかなものを採集したつもりである。第三部では、それをじっくり味わっていただきたい。

収録人名は泉鏡花、島崎藤村、田山花袋、徳田秋声、正宗白鳥、与謝野晶子、吉井勇、堀辰雄、太宰治、三島由紀夫らの作家と国語国文学者では、久松潜一、暉峻康隆、金田一春彦の三氏及び演劇評論家の戸板康二氏を加えた。

なお、第一、二、三部の作品・書簡の配列は発表、発信年次順に掲載した。

第一部の作者と第二部の書簡発信者の略歴は、各項目の末尾に付し、第三部の場合は一括して最後に記載した。

本書刊行について東京堂出版の山下鉄郎氏と編集部各位の多大な尽力のあったことを銘記し、感謝の辞にかえる次第である。

平成四年 秋

文学博士 村松定孝





近代作家書簡文鑑賞辭典

\* 目次

## 第一部

## 近代小説に現われた書簡形式

|                                   |                           |                     |              |       |    |
|-----------------------------------|---------------------------|---------------------|--------------|-------|----|
| 森 <small>もり</small>               | 鷗 <small>おう</small>       | 外 <small>がい</small> | 『即興詩人』       | ..... | 19 |
| 国木田 <small>くにきだ</small>           | 独歩 <small>どつぽ</small>     |                     | 『第三者』        | ..... | 27 |
| 永井 <small>ながい</small>             | 荷風 <small>かふう</small>     |                     | 『監獄署の裏』      | ..... | 35 |
| 近松 <small>ちかまつ</small>            | 秋江 <small>しゅうこう</small>   |                     | 『別れた妻に送る手紙』  | ..... | 43 |
| 芥川 <small>あくたがわ</small>           | 龍之介 <small>りゅうのすけ</small> |                     | 『二つの手紙』      | ..... | 49 |
| 菊池 <small>きくち</small>             | 寛 <small>かん</small>       |                     | 『ある抗議書』      | ..... | 56 |
| 武者小路実篤 <small>むしやのこうじさねあつ</small> |                           |                     | 『有情』         | ..... | 63 |
| 葉山嘉樹 <small>はやまよしき</small>        |                           |                     | 『セメント樽の中の手紙』 | ..... | 70 |

|              |             |
|--------------|-------------|
| 樋口一葉         | 尾崎紅葉        |
| 馬場孤蝶への秘めたる恋文 | 愛弟子鏡花を励ます手紙 |
| 123          | 119         |

## 第二部

### 近代作家の書簡の諸相

|      |      |      |        |        |           |
|------|------|------|--------|--------|-----------|
| 丹羽文雄 | 井上靖  | 太宰治  | 中河与一   | 梶井基次郎  | 谷崎潤一郎     |
| 『有情』 | 『獵銃』 | 『斜陽』 | 『天の夕顔』 | 『Kの昇天』 | 『友田と松永の話』 |
| 109  | 102  | 96   | 89     | 83     | 74        |

|                    |                 |                  |                 |                 |                  |                  |                 |                  |                 |
|--------------------|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|-----------------|------------------|-----------------|
| 野の                 | 川 <sup>かわ</sup> | 神 <sup>じん</sup>  | 佐 <sup>さ</sup>  | 山 <sup>やま</sup> | 坪 <sup>つば</sup>  | 泉 <sup>いずみ</sup> | 夏 <sup>なつ</sup> | 北 <sup>きた</sup>  | 徳 <sup>とく</sup> |
| 口 <sup>ぐち</sup>    | 端 <sup>はた</sup> | 西 <sup>さい</sup>  | 藤 <sup>とう</sup> | 本 <sup>もと</sup> | 内 <sup>うち</sup>  |                  | 目 <sup>め</sup>  | 原 <sup>はら</sup>  | 富 <sup>とみ</sup> |
| 富士男 <sup>ふじお</sup> | 康 <sup>やす</sup> |                  | 春 <sup>はる</sup> | 有 <sup>ゆう</sup> | 逍 <sup>しょう</sup> | 鏡 <sup>きよう</sup> | 漱 <sup>そう</sup> | 白 <sup>はく</sup>  | 蘆 <sup>ろ</sup>  |
|                    | 成 <sup>なり</sup> | 清 <sup>きよし</sup> | 夫 <sup>お</sup>  | 三 <sup>ぞう</sup> | 遙 <sup>よう</sup>  | 花 <sup>か</sup>   | 石 <sup>せき</sup> | 秋 <sup>しゅう</sup> | 花 <sup>か</sup>  |
| 自著書評への礼状           | 慈悲のこもった美しい手紙    | 高雅な詩趣と恩情ある手紙     | 疎開先よりの近況報告      | 後輩岸田國士宛の手紙      | 中條百合子の小説の推薦状     | 故郷の幼な馴染みへの手紙     | 芥川の「鼻」を讀えた手紙    | 出獄を志賀直哉に報告する書簡   | 明治天皇への嘆願書       |
| 176                | 170             | 165              | 161             | 154             | 149              | 142              | 137             | 134              | 128             |

第三部

葉書に見る近代作家の面影

|      |                       |     |
|------|-----------------------|-----|
| 井伏鱒二 | 發掘資料への熱意と同窓の死を悼む手紙    | 180 |
| 佐多稲子 | 『たけくらへ』をめぐる手紙         | 188 |
| 杉本苑子 | 作家は「文章に骨身を削り作るもの」との告白 | 193 |
| 生島遼一 | フランス文学者の日本回帰をしのばせる手紙  | 198 |
| 芳賀檀  | 『新釈太平記』に関する手紙         | 202 |
| 平岩弓枝 | 旅中涙してくれた心温まる手紙        | 205 |
| 田山花袋 | 国木田独歩宛のもの             | 213 |
| 泉鏡花  | 笹川臨風宛のもの              | 215 |
|      | 大正四年一月二九日付            |     |

|                                                                                           |             |     |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|-----|
| 徳田秋声 <small>とくだしゅうせい</small> の秋田雨雀宛 <small>あきたうじやく</small> のもの                            | 大正五年付       | 215 |
| 吉井勇 <small>よししいさむ</small> の近松秋江宛 <small>ちかまつしゅうこう</small> のもの                             | 大正六年付       | 217 |
| 島崎藤村 <small>しまざきとうそん</small> の加藤静子宛 <small>かとうしずこ</small> のもの                             | 大正一三年四月一六日付 | 218 |
| 与謝野晶子 <small>よさのあきこ</small> の西村アヤ宛 <small>にしむら</small> のもの                                | 昭和一〇年三月下旬   | 220 |
| 堀辰雄 <small>ほりたつお</small> の加藤多恵子 <small>かとうたえこ</small> (のち堀夫人)宛 <small>のちほりふじん</small> のもの | 昭和一三年二月一七日付 | 222 |
| 太宰治 <small>だざいおさむ</small> 氏より編者宛 <small>へんしや宛</small> のもの                                 | 昭和二三年四月一六日付 | 226 |
| 正宗白鳥 <small>まさむねはくちよう</small> 氏より編者宛 <small>へんしや宛</small> のもの                             | 昭和三〇年七月二日付  | 228 |
| 三島由紀夫 <small>みしまゆきお</small> 氏より編者宛 <small>へんしや宛</small> のもの                               | 昭和三三年四月一五日付 | 229 |
| 久松潜一 <small>ひさまつせんいち</small> 先生より編者宛 <small>へんしや宛</small> のもの                             | 昭和四七年八月一二日付 | 230 |
| 金田一春彦 <small>きんだいちはるひこ</small> 氏より編者宛 <small>へんしや宛</small> のもの                            | 昭和五一年八月一二日付 | 231 |

|                |            |     |
|----------------|------------|-----|
| 戸板康二氏より編者宛のもの  | 平成四年六月一九日付 | 233 |
| 暉峻康隆先生より編者宛のもの | 昭和六三年六月一日付 | 232 |



